

『花ひらり恋ふわり 番外編 ～パーフェクトワールド～』

著：弓月あや

ill：明神 翼

「エターナルのおー、のろいをー、とくためにー」

自転車を漕ぐ神代湊の後ろで、チャイルドシートに座った、みつく、こと海棠未来が、元気よく声を張り上げる。

海棠家のベビーシッターを務める神代湊は、一緒に歌いながらシャカシャカ自転車を漕いだ。

「ぷりっ、ぷりっ、プリンセス☆ららみいーっ！」

大人気のアニメ『プリンセス☆ららみい』の主題歌を熱唱しながら、自転車は未来が通う保育園の門を抜け、駐輪場に停まった。

自転車用のメットと革のグローブをつけた未来の姿は、キリッとしていてカッコいい。湊はちょっと見惚れてしまったが、すぐに我に返る。

「お疲れさま。さ、メットとグローブを預かるね」

「あい！」

元気よく返事をしているが、お返事が「はい」ではなく、「あい」になっちゃう、未来ちゃん。今日もすごく可愛らしい。

湊は未来のメットとグローブを外して、額の汗を拭いてやった。

「ん。今日もカッコいいよ。さすが、ぼくの未来ちゃん」

「ヤダもう、湊ちゃんったら」

カッコイイの一言で、凜としていた未来は、グネグネと身体をよじる。

未来は本気で結婚したいぐらい、湊が大好き。だから、ちょっとでも褒められると軟体動物のようにグネグネになるのだ。

二人が保育園の建物に向かっていると、玄関で保育士の元木先生に声をかけられた。

「未来ちゃん、おはようございます」

「せんせーっ、おはよー、ござっ、まーす！」

未来は元気よくお辞儀。まだちゃんと「おはようございます」が言えていないのは、舌っ足らずだからだ。

そんなところも可愛くて、湊の心を驚掴みだった。

(うん。元気元気。顔色もいいし肌もつやつや。髪の毛だって、ピカピカさらさら！ だもんね)

ピカピカさらさら。

陳腐な言葉が浮かぶぐらいに、湊は未来に夢中。

そう、夢中なのだ。

(保育園には、ちびっこ満載。だけど、うちの未来ちゃん世界一！)

冷静に見れば、頭がどうかしているようなことを考えていた。自分でも変だと思いながら、ついついニマニマしてしまう。

愛する恋人、海棠一磨のひとり息子、未来。

この子のことが、湊は大切に仕方がない。

大好きすぎて、抱っこしてチューをして、ずっとベタベタしたいぐらい。

(ぼく、ちょっと変かもしれないなあ)

ちょっとどころか、変の最高峰だという自覚が湊にはなかった。恋人の息子が好きでたまらない高校生。普通はあり得ない。

湊も、ちょっと首を傾げながら考えていたが、出した結論は。

「ま、いっか」

非常に軽い一言に、思わず笑みが浮かんでしまう。

(未来ちゃん可愛いし平和だし。うん、大丈夫だよね！)

なにが大丈夫なのだと、万人がツッコミを入れたくなることを思いつつ、湊は自転車で帰ることにする。

帰宅先は自宅ではなく、大好きな海棠家だ。

湊の父親は病気の治療とリハビリのため、長期入院を余儀なくされている。そのため海棠家に居候をしていたのだ。

(海棠さん、もう起きたかな。夕べ寝ないで仕事だって言っていたし。起こさないように、そーっと帰ろう)

彼のことを考えると、ソワソワする。でも浮かんでいる顔は優しかった。

未来に対している時とは、まったく違う穏やかな表情を浮かべながら、湊は帰路につく。

自分にとって海棠家は、自宅と同じぐらい大事な場所。

愛する恋人である海棠と可愛い未来の住む、大切な家だからだ。

□□□

海棠家から保育園まで帰る途中、スーパーに立ち寄った。

手慣れたふう食材を見比べながら、買うものをカゴに入れる。

徹夜で仕事をした海棠が、昼間なのに家にいる。ならば疲れを癒してもらえるよう、手軽に食べられるランチにしようと決めた。

卵にベーコン、蕎麦粉にチーズ。それと豆乳。ガレットに挑戦だ。

(テレビで観て、おいしそうだと思っていたんだよね)

初めて作る料理。ちょっとウキウキしながら陳列棚を見ていく。

(薄く焼いた蕎麦粉のクレープに、ピザ用チーズで土手を作って生卵を割り入れる。それから四

隅を折って出来上がり。……でも、起き抜けの食事には重いかな。チーズは海棠さんの好物なんだけど)

主婦みたいなことを考えながら、買い物を続けた。

小麦アレルギーのある未来には大麦・小麦がアウト。パンもケーキもNG。豆乳はOK。でも牛乳はNG。未来に牛乳のアレルギーはないと知っているが、念には念を入れての判断からだ。

買い物を終えて自転車に荷物を乗せると、愛する人の許へと漕ぎだした。今日は天気がいいし、食事が終わったら海棠を誘って散歩に行こうか。

日差しが、とても気持ちいい。こんな日に保育園へ行っている未来が、可哀想だと思えてきた。

(未来ちゃんが保育園休みになったら、一緒にお弁当を持って外でランチしようかな。うん、草木の名前も教えてあげられるし、いいかも)

小さな未来が、楽しそうにお弁当を食べる姿を想像するだけで楽しい。

そんなことを考えながらスーパーを出かける。このスーパーマーケットから海棠の家まで、五分もかからない。

この恵まれた立地に溜息をつく湊は、まさに主婦目線だ。

だがアレルギー持ちの未来と一緒にいるからには、小まめな買い物が必須条件だった。

(食べられるものが限られているけど、いろいろ作ってあげたいな)

好奇心も旺盛な子供が、アレルギー対応の食品しか食べられない。

不平不満は一度も聞いたことがないけれど、それだけに不憫だ。

「ただいま帰りました」

朝方に帰ってきていた海棠は、まだ眠っているはず。小さな声で帰宅を告げ、リビングダイニングの扉を開く。すると。

「おかえりなさい。未来の送迎、ありがとうございました」

目の前に立っているのは、スッキリした様子の海棠だ。

明け方に疲れて帰ってきたのがウソみたいだった。

髪もちょっと濡れている。シャワーを浴びたのだろう。

「わ。びっくりした。起きていたんですか」

「さっき目が覚めて、起きたら二人ともいなくて驚きました。時計を見たら、登園時間を過ぎていたので、下手に迎えに出ると行き違いになると思って、待っていました」

「疲れていると思って、声をかけずに出かけちゃいました。ごめんなさい」

「とんでもない。おかげでゆっくり眠ることができました。ありがとう」

真っ白なシャツにデニムという、ラフなスタイルの彼。それがもう、メチャ格好いい。

どこまでも爽やかな海棠は、寝乱れた姿なんか見せたりしない。

すらりとした長身。目鼻立ちを整っていて、睫毛まで長い。その洗練された姿は同性でも見惚れてしまうぐらいだ。

髪型も爽やかにカットされていて、微かにコロンの香り。まさに、申し分のない美男子だった。

(いるところには、いるんだよね。こういう飛び抜けて格好よくて、何をやってもサマになっちゃう、スタイリッシュで垢抜けた人)

湊がこっそり溜息をつく。嫉妬する気にもならないほど、素敵だからだ。

湊の父が入院中のため、海棠家に泊まり込みをさせてもらっているから疲れて眠る海棠も、白シャツで爽やかな海棠も、いつもはピシッとスーツを着て仕事に出かける海棠も、もう見放題。

闘病している父には悪いけれど、ものすごく得をしちゃっている。

(お父さん、親不孝な息子でゴメンなさい。今日はお父さんの大好きな、お稲荷さん作って持っていくからね)

心の中で小さく手を合わせ、病院にいる父に謝罪。

父の緊急入院は、父にも湊にも大きな出来事だった。でも父が不在なのと未来がねだるのと、海棠家に滞在し続けるこの厚かましさ。

いろいろ考えていると、海棠がヒョイツと身を屈めて湊の顔を覗き込む。

「急に黙り込んで、どうしたんですか？」

あまりにも接近されて、ぴっとなる。まるでキスする寸前の距離だ。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>